



QFN 通信

Qshu Forest Network News
NPO 法人 九州森林ネットワーク

巻頭文 理事長 佐藤 宣子(福岡県 福岡市)

第 26 号 since2005.6.1

発行日 2019.9.20

今年の梅雨は雨が降らず心配しましたが、8 月後半からの秋雨前線の停滞で集中豪雨に見舞われています。台風の影響もまだ続くと思いますが、会員の皆様におかれましては災害に十分気をつけ、充実した実りの秋となることを祈念しております。

秋のシーズンは、各種のイベントの時期でもあります。当会の第 24 回目の九州森林フォーラムを 11 月 8 日に福岡で、9 日に久山町のけやきの森幼稚園の見学を予定しています。今回のフォーラムでは、木造率が低い公共建築物において国産材・地域産材の利用拡大を図っていくのかを情報共有しながら、行政、受注のあり方、林業地の課題などを探っていきます。詳しくは別紙に記載しているとおりです。お誘い合わせの上、ご参加よろしくお願いいたします。

さて、私にとって、今年秋の大イベントが、所属する九州大学農学部百周年事業です。3 年前から準備をおこなっており、その祝典・行事の責任者を務めています。そうした役回りとなる年齢にあたってしまったということですが、現在その記念式典、祈念講演、祈念植樹、祝賀会（10 月 19 日）の準備を行っています。祈念植樹では、新キャンパスの建物の横にシンボルタワーとなる 3 本のナンゴウビを植える予定です。8 階建ての建物が映えるように、まっすぐ樹高が伸びる樹種ということで選定しました。また、「九州のスギとヒノキ」という本でご存じの方もいらっしゃると思いますが、宮島寛先生（元同大学農学部長）が発見・命名された品種です。九州大学にお越しの際には、是非お立ち寄り下さい。

また、関連イベントとして、韓国緑化の父と称された故、玄信圭博士のご子息による講演会も予定されています（10 月 18 日）。玄信圭博士は、戦前に留学生として九大で造林を学び、1936 年（昭和 11 年）に卒業、1943 年～45 年に副手として勤務されていました。帰国してソウル大学で教鞭をとられる傍ら、農村振興庁長官の重責を担い、戦争で荒廃した韓国の緑化に尽力されました。百周年祈念事業に関係することによって、歴史から学ぶことの重要性を学びました。現在、冷え込んでいる日韓関係ですが、戦前から地道な学术交流が続けられてきたことを知って、嬉しく感じました。

10 月 18 日のイベントは自由参加ですので、チラシを同封しております。学びの秋、11 月の九州森林フォーラムと合わせ、こちらの参加もご検討よろしくお願いいたします。

〈発行〉

NPO 九州森林ネットワーク

本部：熊本県小国町

〈編集責任〉

宮崎県諸塚オフィス



【目次】

第 8 回プレミアム研修会の報告 P.2～P7

第 24 回森林フォーラムについて P8



第 8 回 プレミアム研修会 in 佐賀

「山村と都市との新たな関係づくり」

～佐賀の山を活かした関係人口創出の取組み+工務店向け製材・プレカット工場+古湯温泉ツアー～

令和元年 5 月 24 日(金)、25 日(土)にて、プレミアム研修会を開催いたしました。

今回の研修では、「山村と都市との新たな関係づくり」をテーマとして、佐賀市富士町に訪問致しました。

過疎・高齢化が進む限界集落、深刻な社会問題となっており山間部では担い手、地域の手が少なくて山林、田畑等を維持していく事が非常に困難になってきております。

富士町では、マウンテンバイク愛好家と地域を結びつける事で山村と都市との新たな関係づくりを築かれております。このような取り組みについて学び、地域の方々と交流を深め、風情豊かな古湯温泉に浸かってまいりました。

5 月 24 日(金)

* 佐賀市富士町(佐賀市役所富士支所)集合

2 日間にわたり手厚いコーディネートをいただきました。

佐賀市農林水産部 森林整備課

(右から副島淳一課長 田中博徳係長 納富正敏氏)

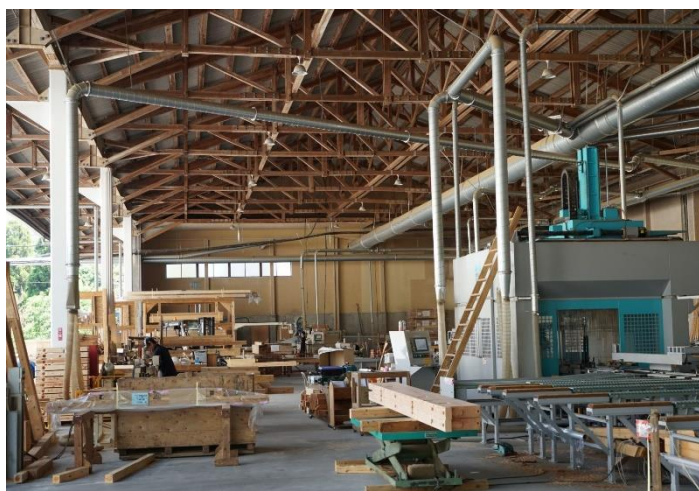


① 黒田木材商事株式会社 製材工場 クリエイティブディレクター 白濱弘之氏

平成 29 年に富士大和森林組合より製材事業を引き継ぐ。赤字であった製材工場だが、プレカット工場と製材所を融合させたことや、黒田木材商事(株)の木材商社としての販路、コスト削減等により、製材所だけで昨年 1 期のみの利益が 4000 万円。当時の森林組合は補助金を受けて経営していたため、販売先等に制限があったが、黒田木材商事(株)になってから九州管内から注文が来る。販売先は、家族経営の工務店のみ、全社の売り上げは 47 億円、今年は 50 億円を見込んでいる。

古参の従業員に加え、若い従業員も多い。利益の 3 割は賞与で従業員に還元。業界で一番の年収にするという目

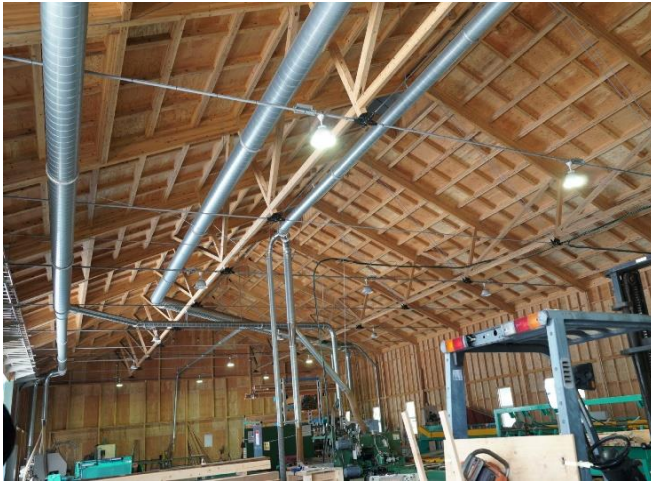
標が従業員のモチベーションを作っている。



＜採材所内の製材棟(杉集成材使用)＞

圧縮に強い木造トラス構造と引っ張りに強い金属のそれぞれの良さを生かした ATA ハイブリッド構法により建設、この構法では、一般流通材を活用して最大 33m までの無柱空間(※内部に柱を立てない)が可能。





＜株式会社佐賀木材市場＞

平成 30 年、木材市場の佐賀木材(株)(負債 17 億円)が黒田木材商事の関連会社となる。この市場に出荷するのは、近隣の林家。市場がなくなると出荷先がなくなる。市場を残す意義は大きい。出荷している林家は、量が多い方が 8 軒、少量を持って来られる方は 10 名。月に 3 回の市で、各回の取り扱い量は 500 m³で月 1,500 m³。スギが 7 割、ヒノキ 3 割。昨年 10 月に会社を引き継ぎ、半期で売り上げ 500%UP。お客さんの欲しい材をトラックに混載して出荷するなど手間が掛かることをしている。素材生産者に立木代の立て替え払いをしたりと「辛い所に手が届く」ことを心掛けている。プロセッサやフォワーダを補助金を活用して購入して、素材生産者などへの貸し出しも行っている。家族経営の林家、製材所、工務店を守りたい。木育にも取り組んでいる。



② 茶畑 ＜苮木集落＞

和紅茶や冷緑茶、地元の抹茶を使った手作りようかんなどでのおもてなし。

苮木お茶倶楽部 松元健二 氏(転勤族で移住)。

苮木集落は終戦後に山林を開拓して茶の栽培を始めた。地質、標高等が茶の製造に適している。茶の栽培の担い手がいなくなったため、移住者等の 3 名で再生を開始。地域おこしとして、茶葉で和紅茶を製造販売。道の駅や直販。やっと採算が取れるようになった。茶畑は集落の畑だったが個人に畝ごとに配分していた。茶畑は全体で 1.5 ～2ha ほど。かつては集落で茶葉の栽培から製品化まで行っていた。集落には 120 名くらいいたが、今は 16 軒。後継者が不在。



5 月 25 日(土)

③ 綿花栽培

水田浩治 氏

2012 年から「綿花栽培プロジェクト」を行う。綿の栽培は耕作放棄地の活用、地域おこしとして実施。会員は 20～30 名いたが、徐々に減少ぎみ。「地味な作業だ」と、ボランティアのリピーターがいない。綿花は 5 種類ほど。洋綿は乾

燥地用。綿の栽培や栗、スイカなどの栽培も。マウンテンバイクの方(後述)の手伝いをいただいて、各作業を行う。企業のボランティアの手伝いを得ている。集落としては、外部の人を入れない地域で、移住やボランティアを入れたりすることには反対だった。だが徐々にボランティアなどを入れていくように。



④ <マウンテンバイク・ちやのきエンデューロ>

マウンテンバイクの専用コース。山林は苮木集落林と集落の個人2名の所有。コース全体は約15ha(コース2つ)。他に古道を活用したコースがあり、そちらは20haほど。計3つのコースで大会を行っている。苮木集落の道の草刈りなどの出方(区役)作業にマウンテンバイクの会のメンバーがボランティアで参加している。区役には、集落の75歳以上の方の出席は免除。集落の人が10名弱の出席のところ、マウンテンバイクの会から25名程度の参加があり、集落にとっては欠かせない存在。春の田んぼの水入れ前の清掃作業などにも参加してくれている。

○福岡マウンテンバイク友の会 代表 増永英一さん

もともとは、この辺で古道を使ってマウンテンバイクで遊んでいた。緩斜面の林地がなくて探していた。苮木集落の理解を得て、人力でコースを作った。木の伐倒はできるだけやらずにコースを設定したが、伐倒が必要なときは集落の方をお願いした。最初は伐倒禁止だったが、所有者の方も参加されるようになって伐採OKに。伐根も人力で掘り起こした。四万十式でコースを作ってきた。ジャンプ台は丸太を入れて、カーブはバンク(勾配)を入れている。あまり自然に手を加えないように。(見学したコースは)全長200mほど。すぐ終わるので何度もできる。区役に参加することで、集落に役に立ったとやりがいがある。最近、草刈りの道具も自分らで購入するように。



参加人数

5月24日 黒田木材商事 ・ お茶栽培 : 10名

5月25日 綿花栽培 ・ マウンテンバイクの取組み(苮木地区) : 9名

第 24 回 九州森林フォーラム in 福岡市

～公共建築物の木質化と地域材活用の可能性～

【日 時】令和元年 11 月 8 日(金) 13:00 ～ 17:00

【場 所】「天神チクモクビル」(大ホール) 福岡市中央区天神 3-10-27

趣 意 書

我が国では、戦後、造林された人工林が資源として利用可能な時期を迎える一方、木材価格の下落等の影響などにより森林の手入れが十分に行われず、国土保全など森林の多面的機能の低下が大いに懸念される事態となっています。厳しい状況を克服するためには、木を使うことにより、森を育て、林業の再生を図ることが急務となっています。

こうした状況を踏まえ、木造率が低く(平成 20 年度 7.5%床面積ベース)今後の需要が期待できる公共建築物にターゲットを絞って、2010 年に公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律が制定されました。国が率先して木材利用に取り組むとともに、地方公共団体や民間事業者にも国の方針に即して主体的な取組を促し、住宅など一般建築物への波及効果を含め、木材全体の需要を拡大することをねらいとしています。近年、公共建築物の木造化、木質化が図られつつありますが、まだ十分とはいえず、木材利用にあたっての課題も指摘されています。解決に向けて、木材を供給する山村自治体、製材、建築、流通、行政の各分野における課題や連携のあり方について、共有することが求められます。

そこで、第 24 回目となる九州森林フォーラムは、「公共建築物の木質化と地域材活用の可能性」をテーマとして、自治体、林業・木材関連事業者、設計士、建築士、学識経験者を交えて議論し、木材利用の新たな可能性と課題を探り、より多くの国産材と地域材を利用するための課題を整理することを目的としています。

基調講演は日本文理大学教授・大分大学名誉教授の井上正文先生にお願いし、パネルディスカッションには、都道府県、市町村、林業事業者、設計士の方々にご参加いただき「公共建築物の木造木質化と国産材、地域材の活用」について、久山町立けやきの森幼稚園の建設を題材にしながら議論することで、今後の林業や製材業、森林環境等の問題解決に必要なことを話し合いたいと思います。

皆さまのご参加をよろしくお願いいたします。

NPO 法人九州森林ネットワーク
理事長 佐藤 宣子

詳細なスケジュール、申し込み方法については、同封のチラシをご覧ください。